

# 共生社会をめざして

木村 萌愛

群馬県立あさひ特別支援学校

昨今、「障がい者差別解消」「障がい者差別禁止」といった言葉を目にする。ただ現在、私たちが暮らす社会では、障がい者に対する「差別」というよりも、「区別」している傾向があるような気がしてならない。人々は無意識に、障がい者を自分とは異なる存在として「区別」して、関心の輪に入れようとしない。そして、社会全体がその「区別」を助長しているような仕組みがあると感じる。「区別」することなく、障がい者を一個人として尊重できる社会こそ、本当の「共生社会」だと考える。

私は、生まれつきの難病を抱えて生まれてきた高校三年生だ。小学校4年生までは普通に歩き、みんなと同じ授業に出て、課外活動にも行っていた。しかし4年生の途中から病気が少し進行して車椅子生活になった。中学生となり、悩みに悩んだ末、地元の通常学校に進むのではなく、肢体不自由の特別支援学校に入学することにした。

特別支援学校に行ってから、社会との関わりがまったくなくなった。普通の世界から切り離されたように感じた。健常者たちが勝手に「区別」して作った「障がい者の世界」に放り込まれてしまった、そんな思いがした。

近年、日本の障がい者人口は年々増加傾向にある。その裏には、医療技術の進歩等の要因もあるが、「発達障害」など今まで障がい者とされていなかった人たちが、障がい者として数えられてきているためだ。障がいに対する理解が深まったという考え方もあるが、一方健常者と障がい者といっそう厳密に「区別」しようとする社会の変化を感じてしまう。本当の意味での「共生社会」と言えるのだろうか。

私は中学2年生の頃、カナダのバンクーバーに語学留学に行った。バンクーバーでは街全体だけではなく、人の心のバリアも少ないように感じた。現地の人々は、車いすをこいでいる日本人の私に対して、気軽に声をかけてくれた。障がい者以前に一人の人間として接してもらったような気がした。

また、友人から「モエにとっては車椅子に乗っていること、車に乗るのに手伝いが必要なこと、車椅子を車に乗せてもらうこととかは日常だから。ただそのモエの日常を手伝っているだけだから。」という言葉ももらった。

バンクーバーの人々や友人は、「障害」や「健常」といった「区別」を作らず、一人の人間として人々が接してくれた。これこそ、本当の「共生社会」の姿だと思う。そして「共生社会」をめざすためには、社会全体がそういった「区別」なく、尊重できるような仕組みが必要だ。例えば、学校現場で「障がい者理解」についての授業が行われたり、もっといえば、特別支援学校や学級をなくして、身体障がいの子も、知的障がいの子も、重度の子も一緒に学習・生活できる学校を設けたりする。子供のころから、障害をもった人たちと触れ合うことで、障がい者がいる社会が「普通」になることが大切だと思う。そういった社会が実現することで、初めて障がい者が一人の人間として「区別」されずに、尊重される本当の「共生社会」が実現できると考える。